View metadata, citation and similar papers at core.ac.uk
brought to you by CORE

# トロロープとアイルランド（3）：*Castle Richmond* における ふたつの視点

藤　居　亜矢子

## は　じ　め　に

*Castle Richmond*（1860）はトロロープ（Anthony Trollope 1815-82）による３作目のアイルランド小説である。作品は，1859年８月に執筆が開始される。この年，トロロープは，郵便職員としてだけでなく，小説家としても大きな転機を迎える。1841年から50年までと50年代の大半を過ごしたアイルランドを去り，再びイングランドで勤務することになった。また，サッカレー（William Makepeace Thackeray 1811-63）の編集する雑誌での連載も決定する。

この作品は，脅迫，相続問題，恋愛など様々な要素によって構成されている。Sir Thomas Fitzgerald とその息子 Herbert が住む Castle Richmond，Lady Desmond とその娘 Clara が住む Desmond Court と Herbert のいとこである Owen Fitzgerald が住む Hap House を中心に物語は進行する。両親の結婚が非合法である，という疑いから Herbert の相続権が危うくなるが，最終的には正当な跡継ぎであることが証明され，Clara と結婚するまでが描かれる。

この作品において最も特異な点は，飢饉時のアイルランドを背景にしているところである。トロロープは，飢饉の被害が最も深刻であった，アイルランド南西部に位置する Cork を仕事で訪れている。この場所は，作品の舞台にもなっている。作品には飢饉時の描写や飢饉に関するトロロープの意見が

示されている。また，飢饉は物語における他の要素とも関係しているため，単なる背景ではなく，作品の中心的要素である，と言える。*Saturday Review* 誌の批評は，「水と牛乳を同じ容器で混ぜるべきではないように，飢饉と恋愛を混在させるべきではない」，と述べている。[1] しかし，「飢饉は，後に恋人となる Clara と Herbert を結びつける手段である」，と Kelleher が述べているように，[2] 飢饉は Clara と Herbert がひんぱんに交流するきっかけである。また，一家の問題と恋愛プロットは大きく関係してくるが，Wittig が指摘しているように，[3] 一家の問題と飢饉に苦しむアイルランドの姿は重ねられている。このことから，飢饉と恋愛は切り離すべきではない。

また，物語の恋愛プロットでは三角関係が扱われる。「イギリスとの併合を続けることは，アイルランドのためになる，ということを描くため，Lady Clara Desmond が象徴するアイルランドに，Owen Fitzgerald が象徴するゲール・アイルランドと，Herbert Fitzgerald が象徴するアングロ・アイルランドの間で選択させている」，と Matthews-Kane が述べているように，[4] 作中の恋愛は，併合を支持するトロロープの主張に大きく関係していることがわかる。

作品の執筆経緯は，イングランドでは，アイルランドを題材とした作品は人気がないことを示している。the *Cornhill Magazine* 誌（以下 the *Cornhill*）が，サッカレーを編集者として，創刊することを知ったトロロープは，サッカレーに手紙を書く。サッカレーと雑誌を出版する Smith, Elder 社はトロロープの作品を掲載できることを喜んだ。この作品は，すでに Chapman & Hall と契約を交わしていたが，*the Cornhill* で連載する許可を得た。しかし，Smith 氏はアイルランドを扱った小説ではなく “an English tale, on English life, with a clerical flavour” とトロロープが述べているように，[5] イングランドを舞台にした作品を望んだ。そのため，*Castle Richmond* は一時中断され，架空の都市 Barset を舞台にしたシリーズの第 4 作目である *Framley Parsonage*（1861）が代わりに執筆されることになる。結局，*Castle Richmond* は *Framley Parsonage* 完成後に再開されることになる。こうして，アイルラン

ドで執筆が開始された作品は，1860年にイングランドで完成することになる。このように，アイルランドテーマの人気がないことを知りながらも，この作品を執筆したのは，一般的なイングランド人とは異なり，自分の生活を良い方向へと変えてくれたアイルランドに対し，トロロープが愛情を抱いていたからである。“I am now leaving the Green Isle and my old friends, and would fain say a word of them as I do so. If I do not say that word now it will never be said.”（2）とトロロープが述べ，Super が，「この小説は，作者のアイルランドに対する愛情のあかしである」，と述べているように，[6] 作品には，アイルランドへの別れの気持ちと愛情が込められている。

トロロープは，この作品以前にも，飢饉に関して公的に意見を述べている。1849年から1850年にかけて the *Examiner* 誌に掲載された手紙においてである。この手紙は，the *Times* 紙に掲載された，飢饉時の政策を非難する意見への反論として書かれた。「小説家ではなく，政府に仕える人間，ということを意識して」書かれた，と Overton が述べているように，[7] この手紙は，政府を弁護する公務員の立場から書かれた。政府を弁護する立場は作品においても示されている。

このように，作品には，アイルランドへの愛情とイングランド公務員としての立場が共存している。イングランドの公務員としての立場，アイルランドへの共感，実際に飢饉時のアイルランドを見た経験が，作品にどのような影響をもたらしているのか，また，トロロープの併合を支持する態度が，作品においてどのように示されているのか，について分析していきたい。

## （1）Fitzgerald 家とアイルランド

手紙と作品に共通する部分は，政府を弁護する態度と飢饉は神がもたらしたもの，という考えである。「Fitzgerald 家の問題は，アイルランドの問題に極めて類似したもの，として示されている」，と Hennedy が述べているように，[8] アイルランドと一家の問題は重ねあわされている。トロロープの飢饉に関する考えは，一家の苦難において示されている。

アイルランドを貧しくしている要因のひとつとして，トロロープは中間管理者の存在を挙げている。不在地主から土地を任されている管理者の中には，利益を得るため土地を小さく分割してまた貸しする者がいる。その結果，ジャガイモしか生産できないような小さな土地しか持てない小作人が生み出されることになる。このような管理者たちの目的は，自分たちの利益だけなので，“discouraged improvements in farming”（66）とトロロープは述べる。「トロロープは，このような中間管理者たちを寄生虫やゆすりだとはっきり呼んでいるわけではないが，Mollett 親子が一家から金を搾り取ろうとしているように，中間管理者たちがアイルランドから金を搾り取ろうとしている，と考えていることは明らかである」，と Hennedy が述べているように，[9] アイルランドから富を奪う中間管理者の姿と，Sir Thomas から金を奪う Mollett 親子の姿は重ねられている。こうして，高額な地代を要求され，貧しさから，生活に絶望している小作人たちと，脅迫者に金を要求され，絶望から無気力になっている Sir Thomas の姿は重なり合っている。地主でありながら，苦しむ小作人に重なる立場は，*The Macdermots of Ballycloran*（1847 以下 *The Macdermots*）の主人公一家の姿においても描かれている。*The Macdermots* においては，中間管理者だけでなく，自分の収入源である領地に関心を持たない不在地主も，トロロープは批判していた。“It was not the absence of the absentees that did the damage, but the presence of those they left behind them on the soil.”（65）と述べられているように，この作品では，不在地主より，彼らの代わりに土地を管理する人間のほうが問題であると述べている。「併合が存在しなければ，不在地主など存在しない」，と Fegan が述べているように，[10] そもそも，不在地主や中間管理者が存在するのは，併合が存在するからである。そのため，併合を支持するトロロープは，この問題を深く追及していない。また，管理者に関して，次のように述べている。

I believe that, as a class, the agents on Irish properties do their duty in a manner beneficial to the people.

That there are, or were, many agents who were also middlemen or profit-renters, and that in this second position they were a nuisance to the country, is no doubt true. But they were no nuisance in their working capacity as agents. That there are some bad agents there can be no doubt, as there are also some bad shoemakers. (133-4)

このように，多くの管理者は問題であるが，全員に問題があるわけではない，とあくまで個人の道徳的な問題であると考えている。ここには，併合や地主制度に対し非難が及ばないように配慮する態度を窺うことができる。

また，飢饉によって，アイルランドは大打撃を受けた。「飢饉に関する，イギリスの過失に対する非難は，現代においてさえ，イングランドとアイルランドの関係を悩ませている」，と Douglas が述べているように，[11] 政府による飢饉への対応は，現在にまで影響を残すこととなった。[12] また，「アイルランドばかりに食料を送っては，イングランドやスコットランドなど，イギリスのほかの地域に不公平だ，という意見もあった」，ということを考慮すると，[13] 併合が存在し，アイルランドがイギリスの一部であったために，甚大な被害が出た，と考えることもできる。そのため，政府の対応への非難は，併合の疑問視にもつながることになる。

このように，政府の飢饉への対応は，多くの批判を受けているが，トロロープは，“in my opinion the measures of the government were prompt, wise, and beneficent” (67) と政府の行動は適切であったと弁護している。手紙においても，“The question is, could an equal amount of life have been saved at a less expense, and with fewer ill consequence?” と述べているように，[14] 政府の活動がなければ，もっと被害者が出ていた，と政府を弁護する態度を取っている。そもそも，トロロープが手紙を書いたのは，飢饉時の政策を非難する記事に反論するためであった。「トロロープは，偉大な作家であると同時に，公務員でもある。あらゆる本能が，当局と政府の苦境に対して敬意を抱かせる」と Hastings が述べているように，[15] トロロープはアイルランドに好意を

抱く作家であると同時に，イギリスの公務員でもある。そのため，トロロープが政府を擁護する態度を取っても不思議ではない。「トロロープは，イギリス政府による統治が続くのは，アイルランドにとって良いことだと信じている。そのため，the *Examiner* 誌への手紙や *Castle Richmond* において，政府を弁護する」，と Tracy が述べているように，[16] 政府の弁護は，併合を支持する態度からも来ていることがわかる。

Douglas は，「アイルランドの多数にとって，飢饉は，アイルランドが本質的にイギリスから切り離されていることを強調した」，と述べているが，[17] トロロープは，飢饉によって分離を招くどころか，イングランドとアイルランドの絆は強まった，と考えている。この考えは，苦難に直面して絆を強くする，Herbert とその母 Lady Fitzgerald の姿において示されており，“there was an infinity of caresses, and deep—deep assurances of undying love and confidence.”（294）と述べられている。

トロロープは，政府を弁護する態度を示しているが，その一方で，アイルランド問題に関しては，イングランドの責任について感じているのかもしれない。「恐喝者がイングランド人であることは，アイルランドの問題はイングランドで生み出される，ということを暗示しているように思われるが，このテーマは，暗黙のままである」，と Tracy が述べているように，[18] 一家を苦しめる Mollett 親子がイングランド人であるという設定は，アイルランドの問題にはイングランド側にも原因があることを暗示している。「Lady Fitzgerald はイングランドを象徴する」，という Knelman の意見を待つまでもなく，[19] イングランド出身の Lady Fitzgerald はイングランドを象徴している。彼女との結婚が現在の問題を引き起こしているという事実も，アイルランドを悩ませる問題は，イングランドとの結婚，つまり併合に原因がある，ということを示唆している。Herbert の困難が両親の過去に原因があることは，現在のアイルランドの問題も過去から続くものであるということを示している。Lady Fitzgerald は，夫が苦しんでいることを知っているが，その原因に自分が関係していることを知らない。また，Herbert も，父の悩みは財政的

なもので，母親が関係しているとは夢にも思わない。ふたりの態度は，アイルランドに問題があることを知りながらも，その原因が併合にあるとは思わないイングランドの態度を連想させる。この問題を追及することは，併合の存在に疑問を投げかけるため，併合を支持するトロロープはこの問題を追求していない。妻を失うことを恐れる Sir Thomas の姿によって，アイルランドも結婚の維持を強く望んでいる，と示そうとしている。

このように，トロロープは，政府弁護，併合支持の態度を取っているが，この態度は，トロロープによる飢饉の扱いにも関係してくる。

## （2）トロロープの飢饉についての考え

飢饉について述べるとき，トロロープは，飢饉と神を結びつける。カービー・ミラーによると，「当時のロンドン『タイムズ』紙は，飢饉は，天の偉大な恵みであり，アイルランド人の不平不満という厄介な問題を解決してくれる，貴重な機会であると宣言した」という。[20] このように，the *Times* 紙の場合，イングランドを悩ませる，厄介なアイルランド人を消し去ってくれるという意味で，神の恵みである，という考えを示していた。トロロープも，“The destruction of the potato was the work of God”（64）と，飢饉は神の所業に他ならぬ，と述べている。同様の考えは the *Examiner* 誌への手紙においても示されており，“the hand of Providence fell upon the country” という表現を用いている。[21] しかし，トロロープの場合，“Such having been the state of the country, such its wretchedness, a merciful God sent the remedy which might avail to arrest it; [...].”（67）と述べているように，飢饉は，アイルランドを悩ませる問題を解決してくれる，という意味で，神の恵みであると，考えている。この点において，アイルランドに対するトロロープの好意を見ることができる。

このように，飢饉は，アイルランド問題を解決するために，神が介入した結果である，という考えをトロロープは示している。そのため，アイルランドと同様，一家にも問題を解決してくれる存在が訪れる。Sir Thomas の友

人であり，法律家の Prendergast である。

「Mr. Prendergast は，招かれて，Fitzgerald 家を助けるために現れる。神は，明らかに招かれていないが，アイルランドを助けるために現れる。[...] 彼らの方法は，厳しく，痛みを伴うが，重要なのは，効果がある，という点である」，と Hennedy が述べているように，[22] Prendergast は，トロロープの述べる神と重ねられている。Prendergast は一家の問題を，神はアイルランドの問題を解決するために訪れるが，両者とも問題を解決してくれる存在である，とトロロープは考えている。トロロープは飢饉後の中間管理者の運命について次のように述べている。“I declare that the idle, genteel class has been cut up root and branch, has been driven forth out of its holding into the wild world, and has been punished with the penalty of extermination” (66). このような，中間管理者たちは飢饉によってアイルランドから一掃される，という考えは，Prendergast によって追い出される Mollett 親子の姿において示されている。

こうして，アイルランドから富を奪うものたちを追い出すことに成功したが，同時に苦難も訪れることになる。飢饉によって，貧しい小作人たちが，飢えと絶望から無気力状態に陥り，亡くなっていったように，Sir Thomas もまた子供たちの未来に絶望し，無気力状態に陥り，亡くなる。「Herbert の深い悲しみは，アイルランドを去ることでしか，飢饉を生き延びることができなかった，名も無き亡命者たちの悲嘆を表している」，と Tracy が述べているように，[23] 飢饉時における移民たちと同様，父の死後，Herbert もまたアイルランドを去らねばならなくなる。しかし，実際にアメリカなどへ移住していった貧しい小作人たちに比べると，Herbert のロンドンでの境遇は，はるかに恵まれている。作品では，飢饉という国家的大災害と一家の苦難が重ねあわされているが，その規模が縮小されているだけでなく，苦難も軽減して描かれていることになる。

こうして，Prendergast の行動は一家に苦難をもたらしたが，最終的には，問題は解決し，幸福な結末を迎えた。同様に，“the famine passes by, and a

land that had been brought to the dust by man's folly is once more prosperous and happy."（65）と述べられているように，飢饉という苦難を体験した後，アイルランドもまた繁栄を取り戻し，幸福になる，とトロロープは考えている。飢饉とその後の繁栄，という考えは，*The Landleaguers*（1883）においても示されている。[24] この点において，トロロープの一貫した態度を窺うことができる。

確かに，アイルランドと同様，一家にも幸福がもたらされた。だが，最終的に結婚の合法性が証明されたのは，Abraham Mollett が父親の重婚を知らせる手紙を Prendergast に送ってきたからである。彼が真実を告げる気にならなければ，結果はどうなったかわからない。そのため，Herbert の問題がうまく解決したのは，偶然の要素も強い。"It seemed to [Herbert] as though some thank-offering were due from him for all the good things that Providence had showered upon him [...]."（476）と述べられているように，Herbert の幸運は，最後まで神と関連付けられている。

このように，トロロープが飢饉について述べるとき，神を持ち出す，という態度は一貫している。「飢饉を神意によるものとして書き直すことで，イギリスの責任を最小限にできるだけでなく，損害の一部は，アイルランドの先見の明のなさに原因があることにできる」，と Corbett が述べているように，[25] 飢饉は，人の力が及ばぬ，神の行いである，と描くことで，政府の責任を軽減することが可能となる。そのため，飢饉は神がもたらしたもの，という考えとその考えが反映された，物語の脅迫プロットには，イングランド公務員としてのトロロープのアイデンティティが強く反映されている，と考えられる。政府を弁護する態度は，併合を支持するトロロープの態度につながるが，この態度は，作品における恋愛プロットにおいても示されている。

### （3）トロロープの飢饉体験による作品への影響

神がもたらした飢饉，政策の支持，という態度は手紙においても窺うことができる。手紙と作品とで最も異なる部分は，飢饉時のアイルランドに関す

る描写が含まれている，という点である。「The *Macdermots* の主人公，Thady は，飢饉の犠牲者を連想させるような人物に遭遇したとき，逃げ出したいと感じたが，この態度は，飢饉の犠牲者に遭遇したときのトロロープの反応と重なるのでは」，と Fegan は述べている。[26] この態度が，トロロープにも当てはまる，という確たる証拠はないが，手紙には飢饉時の詳細な描写は含まれていない。“I never saw a dead body lying exposed in the open air, either in a town or in the country .” と述べているように，[27] 死体など見ていない，とトロロープは手紙において主張している。

「テーマは真実である」(59)，と Hennedy が述べているように，[28] 物語において，Prendergast は真実の重要性について何度も繰り返す。「真実を知っている，あるいは，知っている，と思っている場合の，真実をはっきりと話すことの難しさに，この小説は大きな関心を持っている」，と Hennedy が述べているように，[29] 真実を公にすることは，Sir Thomas にとって耐え難いこと，として描かれる。トロロープにとっての真実とは，飢饉に関することではないだろうか。「飢饉を観察した人は，何度も何度も，自分たちが目撃した惨事を記録することの難しさ，さらには，不可能性さえ強調する」，と Kelleher は飢饉の光景を目撃した人間の態度について述べているが，[30] トロロープも同様に，“very frightful was the course of that violent remedy which brought Ireland out of its misfortunes. Those who saw its course, and watched its victims, will not readily forget what they saw.” (67) と述べている。このように，飢饉について語ることは，トロロープにとって，難しく，辛いことである，と考えられる。「飢饉という窮地について列挙することは，自分のアイルランドへの駐留を可能にした併合そのものを疑うことになるだろう。その一方で，沈黙を保ったままでいることは，アイルランドの人々に対する裏切りになるだろう」(106)，と Fegan が述べているように，[31] 飢饉について語ることで，政策が不完全である，という印象を与える可能性も出てくる。その一方で自分が生まれ変わるきっかけとなったアイルランドへの愛情もある。そのため，何も語らないまま，アイルランドを去ることはできない。こうし

て，手紙を書いてから10年ほど経過した後，トロロープは，飢饉について語ることを決意する。

「*Castle Richmond* には，イデオロギー的な視点だけでなく，人間的な反応も示されている。[...] 小説の場合，公務員としての立場では抑制される，創造力に富んだ，トロロープの共感力が開放される」，と Overton は述べている。[32] このことから，小説では政府を弁護する立場に加え，実際に飢饉時のアイルランドを体験した人間の感情も込められていることになる。政策を支持する態度と，実際に飢饉を体験した人間の感情，というふたつの態度は，主に Herbert において示される。

Herbert が飢えた母子に遭遇したとき，母親は彼に援助を求めてくる。個人に金を渡すことは禁じられているにもかかわらず，Herbert は金を渡してしまう。“But the system was impracticable, for it required frames of iron and hearts of adamant. It was impossible not to waste money in almsgiving.” (186) と述べられているように，政策は万能ではなく，「人間らしい思いやりが，冷淡な理論に対し勝利を得る」，と Fegan が述べているように，[33] 人間的な感情が政策を妨害する要因となっていることが示されている。「女性の哀れな光景は，政治システムの失敗を暴く力を含む」，と Kelleher が述べているように，[34] Herbert と女性たちとの遭遇は，感情の前では，政策は万能ではない，という印象を与える。

その後，さらに政策の無力さが語られる。Herbert は雨宿りするために通りかかった小屋に立ち寄るが，その中では，死にかけている母子がいた。母子が救貧院から援助を受けられない理由は，夫が働いている場合は資格がない，という規則が存在するからである，と政策に関する欠点が指摘される。二人の子供のうち１人はすでに死んでいた。Herbert は死んだ子供にハンカチをかぶせ，すでに死は避けられないものの，ここでも政策に反し，母親に金を渡す。後は死を待つだけの女性にとって，「支援の象徴」[35] である貨幣もこの段階では役に立たない。「政府の反応は，金銭的には豊かであっても，感情的には乏しく，最終的には役に立たない，ということを Herbert の行

動は象徴している」，と Matthews-Kane が述べているように，[36] 飢饉の最終段階においては，政府の経済的支援も無力であることを示している。このことは，この時期における政府の責任を軽減させることになる。また，“Her doom had been spoken before Herbert had entered the cabin.”（363）と Herbert が小屋に入る前から，彼女の運命は定まっていた，と述べることで，彼に責任はないことを示そうとしている。Herbert と同様の体験をトロロープもしたのであれば，これらの主張は，政府を弁護するためだけでなく，トロロープ自身の罪悪感を和らげるためにも行われている，と考えられる。この母子との場面には，政府を弁護する態度とアイルランドに忠実であろうとする態度を窺うことができる。

作品では飢饉に苦しむ小作人たちと脅迫に苦しむ一家が重ねあわされて描かれている。父が死んだ直後の Herbert は，何の権威も財産も持たないと信じられており，未来の行く末がわからない，という点で小作人たちの立場と重なる。しかし，Herbert の立場と彼らの立場が完全に重なることはなく，小屋を出た後，Herbert は自分が彼女たちに比べて幸せだと感じる。

Whatever might be the extent of his own calamity, how could he think himself unhappy after what he had seen? How could he repine at aught that the world had done for him, having now witnessed to how low a state of misery a fellow human being might be brought? Could he, after that, dare to consider himself unfortunate?（362）

この Herbert の考えによって二つの立場がいくら近づいたかに見えても，決して重なるものではないことが示される。母子の描写は Herbert を通して語られる。「入念に，視覚的に表すことで，主体は客体へと変わる。つまり，母と子は見世物となる」，と Hamer が述べているように，[37] 彼女たちは客観的に描かれ，語りの主体になることはない。

また，「物語の観点を，断固として，飢饉中のアセンダンシーの問題にと

どめることで，餓死について書くことを，できるだけ長く避けることができる」，と Fegan が述べ，[38]「現地アイルランド人がちらりと現れることがあるが，個人の体験に注目した語りは存在しない」と Hamer が指摘しているように，[39] 物語は，食べ物に困ることのない支配者階級を中心に進むため，飢饉に苦しむ小作人たちの描写は最低限しか登場しない。描かれることがあったとしても，「小説において，農民が個人として描かれることはほとんどなく，「事例」として表され，苦しむ，餓死寸前の集団として描かれる」，と Wittig が述べているように，[40] 苦しむ小作人たちの姿は集団的に描かれている。

このような，小作人たちの扱いは，飢饉被害者の体験を主体的に語ることで，読者の共感がアイルランドに傾きすぎることを避けるため，でもあるかもしれない。一番の原因は，トロロープの立場が影響していると思われる。「飢饉が最もひどい時期でさえ，貨幣経済とつながっている人間のために，食料が売り出されていた」，と Glendinning が述べているように，[41] トロロープも Herbert と同様，飢えることのない立場であった。また，「トロロープは，飢饉から直接的影響がなかったゆえに，人間として一人一人価値のある，餓死寸前の人々と自分を同一視することに失敗している」，と Moody が述べ，[42]「彼は関与しているのではない，ただ傍観しているだけ」，と Fegan が述べているように，[43] 飢えることのない地位にいるトロロープが，飢えで死にかけている小作人たちの心情を完全に理解することは不可能である。アイルランドに来たばかりの時に書いた *The Macdermots* では，苦しめられる Thady に対し，強く共感する立場から描かれていた。二人には共通点が多く，トロロープは Thady の感情を自分のもののように理解することができた。「*Castle Richmond* は，作者のアイルランドに対する態度における重要な変化を示している。同時に，飢饉に関する，ほぼ一貫した考え方と描写について理解するための，中心となる」，と McCaw が述べているように，[44] 飢饉に関するトロロープの考え方はほとんど変化していないが，手紙に比べ，作品では，アイルランドへの強い感情が示されている。また，*The Macdermots* の

ように，貧しさや圧政に苦しむアイルランドに共感する立場からではなく，地主という支配階級の立場から描かれている。これらの点から，*Castle Richmond* はアイルランドに対するトロロープの態度を考える上で，重要な作品であることがわかる。

## （4）Herbert と Owen

トロロープは，アイルランドテーマの作品において，一貫して，アイルランドとイングランドの関係を扱っている。例えば，*The Macdermots* では，Feemy と Ussher の関係に，アイルランドを自分の都合よく扱うイングランドの姿が重ねあわされていた。*Castle Richmond* では，Clara をめぐる Herbert と Owen の三角関係において示されることになる。「Clara はアイルランド，Herbert はアングロ・アイルランド，Owen はゲール・アイルランドを象徴しており，恋愛プロットは，併合存続がアイルランドのためになる，ということを描こうとしている」，と Matthews-Kane が述べているように，[45] 三人には，それぞれ異なるアイルランドが反映され，Clara とイングランドの影響を受けた Herbert の結婚には，アイルランドはイングランドとのつながり，つまりは併合を重要視するべきだ，というトロロープの考えが示されることになる。イングランドとアイルランド双方への共感で揺れ動くトロロープの立場は，Herbert と Owen の間で揺れ動くClara において示されている。三人には，アイルランドだけでなく，トロロープの考えや態度も部分的に反映されている。

まず，Herbert と Owen に関して分析していきたい。二人とも，Clara との結婚を望む人間として登場するが，様々な点で対照的に描かれている。Herbert が住む Castle Richmond 城は以下のように描写されている。

Neither Sir Thomas nor Sir Thomas's house had about them any of those interesting picturesque faults which are so generally attributed to Irish landlords and Irish castles. He was not out of elbows, nor was he an absentee. [. . .] [Castle

Richmond] was a good, substantial, modern family residence, built not more than thirty years since by the late baronet, [...]. So that as regards its appearance Castle Richmond might have been in Hampshire or Essex; and as regards his property, Sir Thomas Fitzgerald might have been a Leicestershire baronet. (2-3)

このように，Castle Richmond はアイルランド系というより，イングランド系で近代風の建物として描かれている。Sir Thomas もまたアイルランドの地主らしくない人物として描かれている。一家の長男である Herbert もまたイングランドの影響を受けている。Herbert は Oxford で教育を受け，母は Dorsetshire の牧師の娘である。このように，イングランドと関わりを持つ Herbert は，併合によってイングランドの影響を受けているアイルランドを象徴しているといえる。「トロロープがアイルランドを去るときに開始された作品が，相続に関する物語であると同時に，両親の人生を陰らせたものから息子が逃れることを主題とする物語であるのは，偶然の一致ではない」，と Terry が述べているが，[46] トロロープと Herbert には，共通する点がある。トロロープは両親，特に父親の失敗や精神状態から暗い子供時代を送っていた。Herbert の場合も両親の過去のため，人生が台無しになりかけた。父親の名前が Thomas というところも共通している。最終的に，トロロープが公務員としても，作家としても成功した状態で，アイルランドを去ろうとしているのと同様に，Herbert もまた，最後には幸福な門出を迎える。Herbert の姿は，両親の問題にもかかわらず，成功したトロロープの姿と重なる。

イングランドに近い立場にいる Herbert との結びつきには，併合を支持するトロロープの主張が示され，Owen にはトロロープのアイルランドに対する共感が込められている。トロロープは自伝において Owen のことを “a scamp” だと述べているが，[47] 作品内では，Owen の気高さや寛大さについて繰り返し賞賛するなど，彼に対し，共感と賞賛の気持ちを示している。トロ

ロープと同様，Desmond 家も Owen を一種理想化している。Desmond，という名前は歴史にも登場する。実際の Desmond 家はアングロ・アイリッシュ系の貴族で，Fitzgerald とは同族関係にあった。彼らは，ゲール系アイルランドと親密な関係にあった。“[Lady Desmond] had not the means, nor perhaps the will, to fill the huge old house with parties of her Irish neighbours—for she herself was English to the backbone.”（9）とあるように，Lady Desmond は財政状況に加え，本人の階級意識の高さから，アイルランドの隣人とはあまり交流していない。しかし，歴史上の Desmondを反映してか，Owen のことは気に入り，歓迎する。Owen と一家との親密な交流は，ゲール族長と Desmond たちが親しく交流していた，過去のアイルランドを思わせる。このように，Herbert が，イングランドの影響を受ける，併合後のアイルランドを象徴している一方で，Owen は併合以前の，過去のゲール系アイルランドを象徴していることになる。

Herbert に成功したトロロープが重ねられているのであれば，Owen には，過去のトロロープが重ねられている。“It is undoubtedly a very dangerous thing for a young man of twenty-two to keep house by himself, either in town or country.”(7) と述べられているように，若いときのロンドンにおけるトロロープの生活もまた１人暮らしのため，秩序がないものであった。そのためか，Owen の節度がない生活を周囲は非難するが，トロロープは非難するどころかむしろ弁護する。

It was a thousand pities that a bad word should ever have been spoken of Owen Fitzgerald; ten thousand pities that he should ever have given occasion for such a bad word. [...] But those who spoke ill of him should have remembered that this was his misfortune rather than his fault. Some greater endeavour might perhaps have been made to rescue him from evil ways. Very little such endeavour was made at all. (8)

このように，トロロープは Owen がこのような生活を送るのは親身になって世話をしてくれるものがいないからだと考える。Sir Thomas 夫妻も積極的に彼の生活を改善しようとはしなかった。Owen の生活はきちんとした管理を受けていないアイルランドと重なる。アイルランドには適切な管理が必要である，ということを示している。

「ジョン・ブルが勤勉で信頼できる人間であるなら，パディは怠惰でへそ曲がりと考えられていた。前者が成熟して理性的であるなら，後者は気まぐれで感情的であるに違いない」，という分類は Herbert と Owen にも当てはまる。[48] “Herbert Fitzgerald, with his domestic virtues, his industry and thorough respectability”（288）と述べられているように，Herbert の特徴としては，責任感や勤勉さが述べられる。その一方で，Owen に関しては，“His bearing, too, was chivalrous and bold, his language full of poetry, and his manner of loving eager, impetuous, and of a kin to worship.”（115）と述べられているように，感情的な特徴が述べられる。このように，Herbert と Owen はいとこ同士であるが，対照的に描かれていることがわかる。

物語では，Herbert が Sir Thomas の正当な後継者であるか，という問題も扱われる。この問題において，アイルランドにとって誰が正当な統治者であるのか，と示そうとしているのではないだろうか。併合存続を支持するトロロープは，Owen の統治者としての能力に疑問を示している。彼は自分の屋敷で朝まで，友人たちと騒ぐなど不規則な生活を送っているので，周囲の評判はよくない。これは，財産を浪費する地主の姿である。また，Owen の召使の名前は Thady，と設定することでも，統治者としての Owen に疑問を示している。Thadyという名前は，エッジワース（Maria Edgeworth 1767–1849）による『ラックレント城（*Castle Rackrent* 1800）』の語り手の名前であり，*The Macdermots* の主人公の名前でもある。ラックレント城の Thady は悪徳地主たち仕えたことから，Thady が仕えている Owen の地主としての資質に疑問を感じさせる。トロロープの Thady はゲール貴族の末裔であることから，Owen のゲールとのつながりを示している。また，この Thady

は地主であるが，貧しく，理想の地主とはいえなかったので，やはり Owen の貧しさや地主としての能力に問題があることを示している。

一方，苦難を経験した Herbert は謙虚になることを学ぶ。“He would go back to Ireland, he said to himself, and he would never leave it again.” (451) と二度とアイルランドを去らないことを決意するが，この決意は不在地主にならないことを意味する。*The Kellys and the O'Kellys* (1848) の主人公 Frank O'Kelly や *The Landleaguers* (1883) で中心となる Jones 親子もまた，不在地主にならないことを決意していることから，アイルランドに定住する地主をトロロープが支持していることがわかる。“many a young English country gentleman might take a lesson from Sir Herbert Fitzgerald in the duties peculiar to his position.”(476) と述べられていることからも，Herbert がトロロープの考える，理想の地主像を反映していることがわかる。Owen と Herbert の描き方から，過去のゲール族長による統治より，現在の統治体制を維持することを望む態度が示されていることになる。

Clara は，対照的な Herbert と Owen の間で揺れ動くことになる。次に，Clara Desmond についても分析しておきたい。Clara は，Herbert と Owen の間で揺れ動くが，「ゲール，ノルマン，イングランド的な背景は，アイルランドを表すのに典型的なものではないが，アイルランドの混成的な性質を的確に現している」，と Matthews-Kane が述べているように，[49] 彼女は様々な文化が混在したアイルランドを象徴している。Clara は伯爵の娘である。一家は “[the Desmonds] had been kings once over those wild mountains” (5) と述べられているように，ゲール貴族の血統を持っていることになる。また，母親の Lady Desmond はイングランド出身である。このように，Clara にはゲール貴族の血，Desmond というアングロ・アイリッシュ貴族の名前，イングランド出身の母親の血という風に，様々な要素が混ざっていることがわかる。また，彼女の貧しい経済状況も貧しいアイルランドを象徴している。

物語は，Owen と Clara の関係から始まる。トロロープは，Owen に子供のイメージを持たせており，Owen と Lady Desmond の間には母と子のイメ

ージが存在する。彼は Lady Desmond に母のような愛を感じている。

[Owen's face] was a bonny, handsome face for a woman to gaze on, and there was much kindness in [Lady Desmond's] as she smiled on him. Nay, there was almost more than kindness, he thought, as he caught her eye. It was like—almost like the sweetness of motherly love. (15)

アイルランドとイングランドの関係における母子のイメージは他の作品，例えば，*Phineas Finn*（1869）においても用いられ，アイルランドとイングランドの親密な関係を表している。

Owen が子供のイメージを持つ結果，Clara と Owen の関係にも子供のイメージがつきまとうことになる。

It was true that she had promised her love to [Owen], as far as such promise could be conveyed by one word of assent; but it was true also that she had been almost a child when she pronounced that word, and that things which had since occurred had entitled her to annul any amount of contract to which she might have been supposed to bind herself by that one word. (157-8)

Clara の Owen に対する約束は無分別な子供の愚かさからしたもので，守る必要はないと述べることで， Owen に関する責任から開放し，Herbert への移行を速やかにしようとトロロープは試みている。

その後，Clara は Herbert と婚約するが，Owen との関係とは対照的に描かれている。Herbert との婚約は "in a soberer mood, and with maturer judgement" (323) と述べられているように，より成熟した判断によるものとして描かれている。このように，Owen と Herbert はそれぞれ未成熟と成熟とで対照的に描かれている。Clara は，未成熟な Owen から，成熟した Herbert へと相手を変えるが，この変化は，トロロープ自身の変化を象徴しているの

ではないだろうか。

下層階級が，ゲール族長とアセンダンシーを対比することで，「新しい形態の統治を容認させがたくする障碍が生じた」，とイーグルトンが述べているが，[50] 同様のことが，Clara にも当てはまる。二人を比較することで，Clara は Herbert との結婚のほうが好ましい，と理性的に考えるが，心情的には Owen のことを考える。

[It] was now her fate, her duty —and, as she repeated again and again, her *wish* — to marry Herbert. [...] She would be to him a true and loving wife, a wife in very heart and soul. But, nevertheless, walking thus beneath those trees, she could not but think of Owen Fitzgerald. (177)

このように，理性的には Herbert との結婚を決意していても，心情的には Owen のことを気にかける。Fegan が述べているように，Clara とHerbert の婚約に異議を唱える Owen の姿は併合解消を求めたオコンネル（Daniel O'Connell 1775-1847）と重なる。[51] このように，Owen がゲール系アイルランド，または，オコンネルと重なるため，Clara が Owen を選択することは，アイルランドがイングランドの影響から逃れて，独立の道を歩むことにつながる。併合を支持するトロロープにとって，Owen への過剰な共感は避けたいはずである。「感情が干渉する結果，トロロープの小説におけるイデオロギー的主張を台無しにする」，と Matthews-Kane が述べているように，[52] 飢饉の状況を描写する際，人間的な感情が理性的な政策を妨害する要因となっている，ということが示されていた。Clara の場合も同様に，感情が理性的な判断，そして，トロロープの主張にも影響を与えようとしていることがわかる。

Clara と Herbert の関係に正当性を持たせるためか，Herbert の相続問題に直面した時，Clara に変化が訪れる。“Clara's love for Herbert had never been passionate, till passion had been created by his misfortune.” (325) と述

べられているように，苦難に直面したとき，彼に対し新たな感情が芽生え，ふたりの絆も強くなる。Herbert と Lady Fitzgerald においても示されていたように，危機に面して併合の結びつきが強まった，ということを描こうとしている。

最終的に，Herbert と Clara の結婚が無事に成立するが，物語はアイルランドを去った Owen の記述で終わる。「トロロープは，作品の最後で，永久に追放されることになった Owen でもある」，と Moody が述べているように，[53] アイルランドを去る，という点において，トロロープと Owen の姿は重なる。作品完成時，トロロープはイングランドに帰っていたので，よりアイルランドを懐かしく思う気持ちが強かったのかもしれない。飢饉後，アイルランドには繁栄が訪れた，と主張するのであれば，結婚の場面で幕を閉じ，幸福な未来を予期させるほうが適切な終り方である。しかし，Owen に対する強い共感から，「飢饉を舞台にしていることを考えると，小説の最後の話しぶりが物悲しく，最後の調子が極めて悲痛なものになっているのは，適切ではないのではないか」，と Hennedy が述べているように，[54] Owen に関する物悲しい語りで終了する。このように，最後まで，Owen の影響力の強さが示される。

Owen の存在は，最終的にトロロープの主張にも影響してくる。Herbert と Clara の経済的にも心情的にも充実した結婚は，トロロープが望む併合の姿と重なる。「階級と財政的な地位に基づく結婚を支持する，Herbert と Clara の最終的な結婚は，Lady Desmond のように，真実の愛が見出される物語を評価する読者を不安にさせる可能性がある」，と Matthews-Kane が述べているように，[55] Lady Desmond は娘の結婚に完全に満足しているわけではない。“Lady Desmond could not be cordial with her daughter. She made more than one struggle to do so, but always failed. She could— she thought that she could, have watched her child’s happiness with contentment had Clara married Owen Fitzgerald [...]” (477). このように，Owen に対する共感が，Herbert との結婚に完全に満足できない原因となっている。

Lady Desmond と同様の態度が，批評でも示されている。1860年 5/19 の *Athenaeum* 誌は Owen こそが「真の，そして唯一の主人公」である，[56] と Herbert より Owen のほうに関心を示している。また，「Clara は読者の同意に反して結婚した。[. . .] 読者は，彼女の選択に全く共感しないだろう」，と述べられているように，[57] Owen より Herbert を選択した Clara を支持していない。また，1872年に書かれた，*Dublin Review* 誌における批評においても，「Herbert とその花嫁の，安定し，幸福で，財力のある，平凡な未来には関心がない。だが，放浪する Owen の後について行く」，[58] と幸福な結婚よりも Owen のほうに関心を寄せている。

## お　わ　り　に

トロロープは，より安定した併合を象徴している Herbert の結婚を支持している。同時に Owen に対しても共感を抱いている。 Herbert と Owen，双方への共感は，トロロープの併合を支持する態度と，アイルランドへの共感，というふたつの立場を表している。批評の中には，「水と牛乳のように，飢饉と恋愛を混ぜるべきではない」，というものがあった。それよりも，併合を支持するイングランド人としての立場とアイルランドへの共感，理性と感情，Herbert と Owen，などの相反する要素が同時に含まれていることのほうが問題なのかもしれない。「この作品は，自らを破壊する原因を含んでいる」，と Fegan が述べているように，[59] 作品に含まれているアイルランドへの共感や飢饉を体験したときの感情がトロロープの主張を弱める結果となっている。*The Macdermots* においても，主人公 Thady への共感が，物語をアイルランドにより共感した結末を迎えさせていた。後日談があるものの，最後まで主人公を中心とした構成となっている。*Castle Richmond* の場合，Owen の影響力の大きさを示して終わることになり，Herbert の幸福な結婚が目立たなくなっている。この点において，*The Macdermots* よりも，トロロープのアイルランドに対する共感が作品に影響をもたらしている，と言える。

注

この論文で用いたトロロープの作品は，以下の版による。

Trollope, Anthony. *An Autobiography.* Ed. Michael Sadleir and Frederick Page. New York: Oxford UP, 1999.

———. *Castle Richmond.* Ed. David Skilton. London: Trollope Society, 1994.

———. *The Landleaguers.* Ed. David Skilton. London: Trollope Society, 1995.

———. Trollope's Letters to the *Examiner.* Ed. Helen Garlinghouse King. Princeton University Library Chronicle 26(2) (1965): 71-101.

1. Donald Smalley Ed. *Trollope: The Critical Heritage.* (London: Routledge & K. Paul; New York: Barnes & Nobles, 1985), p. 644.
2. Margaret Kelleher. *The Feminization of Famine: Expressions of the Inexpressible?* (Cork: Cork UP; Durham, NC: Duke UP, 1997), p. 43.
3. Ellen W. Wittig. "Trollope's Irish Fiction." *Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 9(3) (1974), p. 106.
4. Bridget Matthews-Kane. "Love's Labour's Lost: Romantic Allegory in Trollope's *Castle Richmond.*" *Victorian Literature and Culture* 32(1) (2004), p. 118.
5. *An Autobiography,* p. 142.
6. R. H. Super. *The Chronicler of Barsetshire: A Life of Anthony Trollope.* (Ann Arbor: The U of Michigan P, 1991), p. 111.
7. Bill Overton. *The Unofficial Trollope.* (Sussex: Harvester Press; Totowa, N. J.: Barnes & Noble Books, 1982), p. 22.
8. Hugh L. Hennedy. "Love and Famine, Family and Country in Trollope's *Castle Richmond.*" *Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 7 (1972), p. 57.
9. *Ibid.,* p. 56.
10. Melissa Fegan. *Literature and the Irish Famine, 1845-1919.* (Oxford: Clarendon P, 2002), p. 112.
11. Roy Douglas. Liam Harte. Jim O'Hara. *Drawing Conclusions: A Cartoon History of Anglo-Irish Relations 1798-1998.* (Belfast: The Blackstaff P, 1998), p. 51.
12. 例えば，イーグルトンも，イギリス政府の責任について述べている。

    この特筆すべき破局に関していう限り，その責めを負うべきは，アイルランドの悪弊ではなく，アイルランドをないがしろにしようというイギリスの身勝手な決定であった。この事件の究極的な原因は，トロロープがどのように思いをめぐらしてみたにせよ，比類ない自愛に満ちた神の摂理などで

はなく，政治と所有関係にかかわることがらだったのである。（テリー・イーグルトン『表象のアイルランド』鈴木聡　訳　紀伊国屋書店，1997年，pp. 55-6.）

13. Cecil Woodham-Smith. *The Great Hunger: Ireland 1845-1849.* (London: Penguin, 1991), p. 137.
14. Trollope's Letters to the *Examiner,* p. 75.
15. Max Hastings. Introduction. *Castle Richmond.* By Anthony Trollope. (London: Trollope Society, 1994), p. xv.
16. Robert Tracy. "'The Unnatural Ruin' Trollope and Nineteenth-Century Irish Fiction." *Nineteenth-Century Fiction* 37 (1982), p. 362.
17. Douglas op. cit., p. 51.
18. Tracy op. cit., p. 370.
19. Judith Knelman. "Anthony Trollope, English Journalist and Novelist, Writing about the Famine in Ireland." *Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 23 (1988), p. 62.
20. カービー・ミラー，ポール・ワグナー　『アイルランドからアメリカへ　700万アイルランド人移民の物語』茂木健　訳　東京創元社　1998年，pp. 53-4.
21. Trollope's Letters to the *Examiner,* p. 80.
22. Hennedy op. cit., p. 56.
23. Tracy op. cit., p. 371.
24. *The Landleaguers* では以下のように述べられている。

    When man has failed to rule the world rightly, God will step in, and will cause famines, and plagues, and pestilence—even poverty itself—with His own Right Arm. But the cure was effected, and the country was on its road to a fair amount of prosperity, when the tocsin was sounded in America, and Home Rule became the cry. (298)
25. Mary Jean Corbett. *Allegories of Union in Irish and English Writing, 1790-1870: Politics, History, and the Family from Edgeworth to Arnold.* (Cambridge: Cambridge UP, 2000), p. 129.
26. Fegan op. cit., p. 112.
27. Trollope's Letters to the *Examiner,* p. 83.
28. Hennedy op. cit., p. 59.
29. Hennedy op. cit., p. 61.
30. Kelleher op. cit., p. 17.

31. Fegan op. cit., p. 106.
32. Overton op. cit., pp. 23-4.
33. Fegan op. cit., p. 126.
34. Kelleher op. cit., p. 259.
35. *Ibid.,* p. 257.
36. Matthews-Kane op. cit., p. 128.
37. Mary Hamer. Introduction. *Castle Richmond. By Anthony* Trollope. (Oxford; New York: Oxford UP, 1989), p. xvi.
38. Fegan op. cit., p. 120.
39. Hamer op. cit., p. xv.
40. Wittig op. cit., p. 106.
41. Victoria Glendinning. *Trollope.* (London: Pimlico, 2002), p. 165.
42. Ellen Moody. *Trollope on the Net.* (London: Hambledon Press, 1999), p. 40.
43. Fegan op. cit., p. 119.
44. Neil McCaw. "Some Mid-Victorian Irishness(es): Trollope, Thackeray, Eliot." *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture.* Ed. Neil McCaw. (Aldershot: Ashgate, 2004), p. 133.
45. Matthews-Kane op. cit., p. 118.
46. R. C. Terry. Ed. Oxford Reader's *Companion to Trollope.* 1999. (New York: Oxford UP, 2001), p. 87.
47. *Autobiography,* p. 157.
48. Declan Kiberd. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation.* (London: Vintage, 1995), p. 30.
49. Matthews-Kane op. cit., p. 119.
50. イーグルトン op. cit., pp. 109-10.
51. Fegan op. cit., p. 127-8.
52. Matthews-Kane op. cit., p. 125.
53. Moody op. cit., p. 41.
54. Hennedy op. cit., p. 53.
55. Matthews-Kane op. cit., p. 124.
56. Smalley op. cit., p. 112.
57. *Ibid.,* p. 112.
58. *Ibid.,* p. 369.

59. Fegan op. cit., p. 123.

## 参　考　文　献

### Primary Sources

Trollope, Anthony. *An Autobiography.* Ed. Michael Sadleir and Frederick Page. New York: Oxford UP, 1999.

———. *Castle Richmond.* Ed. David Skilton. London: Trollope Society, 1994.

———. *The Landleaguers.* Ed. David Skilton. London: Trollope Society, 1995.

———. Trollope's Letters to the *Examiner.* Ed. Helen Garlinghouse King. Princeton University Library Chronicle 26(2) (1965): 71-101.

### Secondary Sources

Corbett, Mary Jean. *Allegories of Union in Irish and English Writing, 1790-1870: Politics, History, and the Family from Edgeworth to Arnold.* Cambridge: Cambridge UP, 2000.

Douglas, Roy. Harte, Liam. O'Hara, Jim. *Drawing Conclusions: A Cartoon History of Anglo-Irish Relations 1798-1998.* Belfast: The Blackstaff P, 1998.

Fegan, Melissa. *Literature and the Irish Famine, 1845-1919.* Oxford: Clarendon P, 2002.

Foster, R. F. *Paddy & Mr. Punch: Connection in Irish and English History.* Harmondsworth, Middlesex: Penguin, 1995.

———. *Modern Ireland,* 1600-1972. London: Penguin, 1989.

Glendinning, Victoria. *Trollope.* London: Pimlico, 2002.

Hamer, Mary. Introduction. *Castle Richmond*. By Anthony Trollope. Oxford; New York: Oxford UP, 1989. ix-xxii.

Hastings, Max. Introduction. *Castle Richmond.* By Anthony Trollope. London: Trollope Society, 1994. vii-xvi.

Hennedy, Hugh L. "Love and Famine, Family and Country in Trollope's *Castle Richmond" Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 7 (1972): 48-66.

Kelleher, Margaret. *The Feminization of Famine: Expressions of the Inexpressible?* Cork: Cork UP; Durham, NC: Duke UP, 1997.

———. "Anthony Trollope's *Castle Richmond*: Famine Narrative and 'Horrid Novel'?" *Irish University Review: A Journal of Irish Studies* 25(2) (1995): 242-262.

Kiberd, Declan. *Inventing Ireland: The Literature of the Modern Nation.* London:

Vintage, 1995.

Knelman, Judith. “Anthony Trollope, English Journalist and Novelist, Writing about the Famine in Ireland.” *Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 23 (1988): 57-67.

McCaw, Neil. “Some Mid-Victorian Irishness(es): Trollope, Thackeray, Eliot.” *Writing Irishness in Nineteenth-Century British Culture.* Ed. Neil McCaw. Aldershot: Ashgate, 2004. 129-157.

Matthews-Kane, Bridget. “Love’s Labour’s Lost: Romantic Allegory in Trollope’s *Castle Richmond.” Victorian Literature and Culture* 32(1) (2004): 117-131.

Moody, Ellen. *Trollope on the Net. London*: Hambledon Press, 1999.

Overton, Bill. *The Unofficial Trollope.* Sussex: Harvester Press; Totowa, N. J.: Barnes & Noble Books, 1982.

Smalley, Donald Ed. *Trollope: The Critical Heritage.* London: Routledge & K. Paul; New York: Barnes & Nobles, 1985.

Super, R. H. *The Chronicler of Barsetshire: A Life of Anthony Trollope.* Ann Arbor: The U of Michigan P, 1991.

Terry, R. C. Ed. *Oxford Reader’s Companion to Trollope.* 1999. New York: Oxford UP, 2001.

Tracy, Robert. “‘The Unnatural Ruin’ Trollope and Nineteenth-Century Irish Fiction.” *Nineteenth-Century Fiction* 37 (1982): 358-382.

Wittig, Ellen W. “Trollope’s Irish Fiction.” *Eire-Ireland: A Journal of Irish Studies* 9(3) (1974): 97-118.

Woodham-Smith, Cecil. *The Great Hunger: Ireland 1845-1849.* London: Penguin, 1991.

テリー・イーグルトン『表象のアイルランド』鈴木聡　訳　紀伊国屋書店，1997年。

カービー・ミラー，ポール・ワグナー『アイルランドからアメリカへ　700万アイルランド人移民の物語』茂木健　訳　東京創元社　1998年。

# Two Viewpoints in Anthony Trollope's *Castle Richmond*

**Fujii, Ayako**

*Castle Richmond* (1860) is a third Irish novel of Anthony Trollope (1815-82). It was begun in 1859 when he left Ireland where he had lived since 1841. The novel was written as he bade his affectionate farewell for Ireland. The story deals with the Potato Famine. Trollope firmly supported the policy of the British government during the famine both in *Castle Richmond* and in a series of his letters to the *Examiner*. As he was an English civil servant who affirms the Union between England and Ireland, it was natural that Trollope defends the government. In this paper, it will be discussed how both his affection for Ireland and his identity as an English official are represented in this novel.

Trollope thinks that the famine is the remedy that God sent to solve problems in Ireland and that it ultimately bring prosperity to Ireland. This thought is shown in hardship of the Fitzgerald family by paralleling their problem with Ireland's. While Trollope suggests that some of problems in Ireland are caused by England in the story of the Fitzgeralds, he never approve of breaking up the Union because he believes that the Union benefits Ireland. By representing the famine as providential, it enables him to lessen the responsibility of British government. So his view of the famine reflects his identity as an English public servant.

Trollope vividly depicts the famine scenes to be true to Ireland, though he fails to identify himself with the suffering, starving Irish. The sights of famine victims expose the fault of the authorities and give the impression that the government's response to the famine was inadequate. Thus, Trollope's loyalty to Ireland interferes with his justification of England. His faithfulness to Ireland and English government is not compatible.

In novel's love plot, Trollope tries to show the benefit of maintaining the Union in marriage between Herbert Fitzgerald and Clara Desmond. So Clara

must choose Herbert instead of Owen, her first love. Trollope describes Owen sympathetically in spite of his intention. The author's sympathy for Owen made critics unsatisfied with Herbert's marriage. Trollope's sympathy with Ireland has great influence in this novel.